西藩野史

二

和書門
類
一五二六〇號
一二六函
一二架
八冊

内閣文庫
和書
類
一五二六〇號
冊
一二函
一三架

内閣文庫
番號 和 15260
冊數 8(2)
函號 151 134

国立公文書館
National Archives of Japan

町野田久成獻納之章

西藩史要之部

師久公

貞久公の第二子 長子川上頼久は新田側室乃生む所也故に家督たるべき筈なれども宗久公早世に付貞久公嗣に立

因幡守に被補道乃憲女忠中二年乙丑八月十二日生る生母

尼と称す後二郎左衛門尉と改む太史判官上総介に

任ず後に位下して叙せらし村國中大小城を沈め軍に勇

貞和より貞治に至て十餘年征戦之事八貞久公傳に在り

貞治二年癸卯

八月十四日 道誉公村國を攻て師久公を奔る川

車ハ道隆ニ乃傳に在り　却是　伊久公蓮別　硯山城平佐小居酒匂
次郎左馬頭入道貞澄　河内守護代として　宮城高山城
ニ籠り助く

永和元年　貞治七年二月十七日應安と改元
八年二月十七日永和と改元
私云此間　氏久公隔別に在て稜石氏と戦ふ又日弱に於て但馬
相良等と戦ふ　伊久公其事に與ハらざるに由て此に闕く可き者歟

弼重門　入来院氏其先渋谷氏の庶流　貞久公乃傳に在り入来院定心独て入来を
領す其子平次公重弘安中蒙古襲来の時に戰死ス定心五世重門是也　建永中　貞久公の為に廣清色城傳元久公三年に於て
ると　中世渋谷史弼重聰乃女ハ貴久公の妻　元亀元年十世重聰先に孫太郎
乃城百次平佐等と　して降る入来院一所と弼ふ十三世弼正悪重豊嗣ると
右馬次忠将れ次ると養ひ女と妻せて嗣ると　又六重時し孫次磨長庚ると
三百濃加に戰死ス亦一女有て男子なし　薩摩守義尚乃男と養ひ女に妻伯耆守
重高と称ス其子伯耆守重国と称ス初め重時永録中検地の時入来院と轉して

湯尾と称ふ入来ハ太守公れ領となる重国に至て後入来に逗留せる入来に在る亦乃
士人と重国の地ハ　して其命と聽ふ　むる其孫石見守重頼清て入来と二分し　士人と
称ス其子年人佐重治に至て士人の城と　太守公乃地と　是と相伯と号ス号する
島津丹波忠通の次ると養て　ると　ス忠磨之助重堅と称ス亦弼　清義
忠顕の次ると養ふ又忠清　　光久公れると養ふ主馬重雄と称
其子主馬定恒又弼　　純豊公乃事ると養ふ石見定清是なり

宮城と侵と城兵撃出して戰ふ利なくして有名の士洋
多戰死す　酒匂石塚右兵衛中条善戰死ス　退く　ものなくして
折て入る　して城と攻撃ひ川　城兵大石と拠て防禦ス重
門是に高り胄と称う　中に籠て死す　或ハ城中武士の内太郎太郎ハ等数十人戰死して城破る
於是破山と囲むと　　職軍退き去る　渋谷重忠　若狭守重親か　是と懐中大に
山北の軍と部　　後山城と囲む相良兵庫允賢安　肥後国球

葉乃至葉九代
二頁と重複す

源義小意〳〵すゝむ城兵寡
き〻大軍に向ふ時に　氏久公志布志に生て兵を出さ
輕装を馳て直に硫黄山に向ふ　伊集院の軍是に従ふ
薩摩山を出て海
軍を海川市来太郎左衛門氏家　市来乃至薩摩八山を塞く
其後を絶川　氏久公進退途窮し人を遣し氏家に説て
田孤軍深く入り来て大敵あり海陸を防ぎ援軍大く
霧を冒て敵を悉く是を破り敵軍を逐て薩州
軍を退しめよ氏家田敵を敗る事は此の如き事と
を事と滑く義弘足を切り　公是を聞て氏家に賞

論を用ひ源軍退るを以て
源義相良頼兵乃至を見て夜に乗て遁去る
帥公発と名を　氏久公日別に帰る
二年丙辰
三月二十一日　帥久公薩山城小兵を率て
小藤の石山道を過て泊る
氏久公
氏久公中世の英主大友親治の女加賀三年丙辰生る
又三郎と称し後三郎左衛門尉と改む後理亮義治を養

桜に公二女ありの伊集院頼久の妻や
氏家に嫁と計を計策なり為

寺に付し

慶長四年辛巳

四月貞久公鹿児島を発し事代貞久公の侍に在り　氏久公に賜ふ

是東福寺に居を神忠久公信州大田庄に新たに設け

清神伊勢神宮に在り　を伝へ　貞久公是を薩州山門院本多社領

に移す　傳云公人なりて霧に神嚴と薩州に移し　故に伊州の民庶吏に神嚴と呼て祭る　如是　氏久公

席四海に遷し東福寺神山伊佐職の寺　と號国山安養院

と改号して別当寺とす　按に法勝上下大明神と云ふ建御名方本社八信州諏訪郡南方の神社下社事代主命本社摂州長田神社也、組貴八公請て正一位に任ず　又八幡宮を

近代家譜公額書して華表に懸く

府下に移す　今の若宮八幡是也　傳云義八幡と称す　慶長四年

国家の戦を事代貞久公の侍に在り

貞治二年癸酉

四月貞久公新城に移り　姉公氏久公と共に

於是氏久公大隅国安養寺に住し　隅州大姶良城

に移る又去て日州志布志に居す　貞久の侍に在り　先是隅州

貴於邪主新城に移り　国山に応して新たに城を築く事年

事代貞久公傳に在り　又相模長厚元貞長に到り貞長の家

を継ぎ　今四分屠すに　新たに城を築く　清水城と名付る

恣ま郡縣を掠む正宮の社人と為て氏久公に告ぐ　乙
矢隈（正宮）の軍して是を敗む三年九月して奇計を逞
して桜木清水を攻て遂に板東城を陥て城を収る高城（北城）
の軍次　公又をして是を破る板東を撃て接戦して
賞を加へ記に在り　公桜木に入る賊又来襲す　乙窟賊し是
を共に　侍云此時伊集院長門守張山左衛門本田重治其の氏族切腹の覚力
絶倫力を把て敵を斬る過て大石を破る今に存し金吾石と云ふ
本田信濃守重治　本田氏の侍　貴久公乃天文十七年に於て桜に本田貞親を守
忠久公の府清水に封せらる其後桜東氏是を掠奪す
濃代々清水に住して封
氏久公此為に肥後国に戦死し桜に此時　氏久公肥後国
に到て相良氏と討たるの未其詳を他日可参考
乃士を濃ふ　侍云天正六年桜
東氏の侍

慶安三年　庚戌　貞治七年二月七日改元
神相良賓長伊東祐重と香城に戰て相良氏敗績
事は貞久公延文四年に在り　資忠将軍尊氏新せらるる所に郡城と云ふ南郡く
六年の後永和元年今此郡城と築き小倉氏是に居る
今年又郡城　此時北御郡護守義久桜山兵部守音久桜山氏二世実
城に在り桜に郡城は文和四年十二月十二日七郎左衛門尉
乃士と濃ふ　侍貞久公一族
谷　侍貞久公一族
二年に在り
新八是と土持伊豆守政綱より伴八人張り
殺と神より報国に来て仕上　勝久公の老中に任ず
真書　小原氏世々是と称す　侍
久公延文四年に生
福島　未考　南方　薩州鉛山頃大川辺新造彫塔
桜宮給黎七郎と南方と云ふ　紀六十二人是に宗

軍を部して本郷に云へり城賊ども邦墟を拠む日州
震渡して城乃尋の旦夕なるを氏久公孤軍城
仲ひ志和志と云へり天子峯（肥前の西城寺の）より軍人（田集院掃部
及賊の氏所属氏次ぎ好く事金を云）三原朝臣とん合戦の始まるを　公世子
又三郎公（即元久公也年八歳）に告て曰賊軍四集して吾軍孤し急
敗計り難し世子亦急に京都に帰り援を求めんと欲す氏久公是を聞て世子を慰めて曰
勢を以て世子の帰を待て無恐と雖ども我為に賊を討て後城
勢を以世子の不肖して曰君父の危を救ふ道を以て我情
所に出ず所して義を舎て一危を以て嘆を称を

氏久公是を聞て世子を慰めて曰城賊ども邦墟を拠む日州
田集院を親（世子の侍）に又中（或云翔）次郎氏親（年十一）を教編して
世子の不法を責め出帰を責む拠士意を決し法に依て是
氏久公軍を率ひ出て（未詳）小進む（二月廿八日）朝を迎て賊部に軍を
従軍八百人余を二隊に分て一を田集院（拠一授と云）一を
新納寛人（月一授と云）左右に拠り一隊は氏久公（小一授と云）中
軍に拠り元を折て旗指小原又七郎旗の進止
を問ふ田集院曰進て敵を後に出て小原諾し
終に平陽を渡て敵に命を時に城中出て義久樵山

高久議して曰く 氏久公を殺し奸臣を除くこと
乃罪なく義兵を興すべし 大に憤激して突出て
敵に向ふ其勢絶て七十餘人 平田彩高 宗家 土岐義人 橋敏
と称して勝に乗じ直に進む 元久公 敗て田楯原京季の藤の
梅と呼ぶ所に二士揚云て曰 吾何ぞ京季に出んや
先登して奮戰し義久高久を捕て衝撃す 一人百
に当るといへども元寡相敵とし須臾にして敗走ス
於是小弟泳二郎基忠小弟七郎忠宣 共に義久 嫡子 基数十人
戰死し義久も又傷を蒙て敵兵東方を囲む

為に戰ふ遂に圍を破て城に帰る 氏久公八幡田彩網を
左右に従へ高原に戰ふ 公乃軍金剛を心期とし
其勢疾風迅雷の如し 賊軍敗て賊将相良
氏 相良伊東六郎 菊池尼 菊池四郎 潰谷出羽守
公乃軍亦大に勇に奮て軍旗収むと雖ども
首級を裹む 伊集院大隅守久氏 伊集院氏世 潰谷出羽守
首級とんで人を語て曰 吾和女と彼の妻とを絶て
未嫁ときは敵ひなり 出るに及て彼使を出して平
出て曰 和女未生初分を愛して活に死

懾ぶるゝん事是を拒て田沙弥に職を嗣しめんと欲す
ゆゑ〳〵戦に臨んで命を捨し前を揚を挑て出きり
今異〳〵如此応其情を懲む久氏帰て後女を嫁せん
尼となし分国庫に（田集に院）しに居〳〵処勇武を食きむ時
三月二日 西軍備を整ひ営を休り 三月三日 又〳〵戦ふ 公の軍
寡しといへども義を奮て一以て多に当る敵又
敗走を為に出て営る敵又機小示して戦ひ 公の
軍大に破る本田重親小示を殺す 石見示戦死
公大に怒り精神と 破る本田義ひ自先鋒に進に敵又

淡乱物を奇逆を思ひ切て樹く城を都城金さるを
得きり 俗云氏久公愛馬りりひこたく井宝と名けくを奥州の産なり 今度の
戦ひ出石右京亮に借して京くしむ備きり二月又備を得て馬
しり跑り馬をたるり物 公の軍敗まこと衆奔るの時右京亮亦走て敗北に遂
敗後 公の利と得をけりを大に通きり 加川以番二月ひ 公に面をる事一度
もと其夜馬尋て右京亮に乗る於是明日馬を引て 公に請り物と告る後
して田馬牧主と尋る人をして危に嫌んて立と棄て走る是と何とも云りんや
公其直にて陳きなる故
新馬と右京亮に賜ふ

永和元年乙卯 応安八年二月二十七日永和と改元

渋谷業相良賓長と共に 作公は飛騨に攻む
氏久公桜井と辛しく乱る敵 車八作久と 渋川渋谷は
薩加と城東に入来院 今の入来拒柳 邪芸院 宮城霧田大村山崎伏志 果来菊南邪芸院と云

と雖（是と濃州巴ケ原と云）武藤蔓延して勢国中に傾く武田開発の
重臣（高坂の云）猛将と離き氏久公に通を於是公軍を率
武田に到り相陣して濃州と河州とに滅亡を怒大軍を率
（牛屋傳貞久公文和元年に在り）義刈（傳に在り）と共に公と戦ふ
公の軍大に破り武田氏七本田氏を滅亡し公軍を収
め山を越て退き職務に帰して駐屯す公自に軍を返し秋
先登して敵を彰す公の軍又奮ひ戦ふ敵敗北
濃州大村北軍北中に死し北を追ひ首級千を斬る
（是と氏久公山川合戦と云）神（慶安三年）今川伊豆守氏世入道了俊（今川氏其先源義家の三男義

国の孫義実三男義氏北子世氏の二男国氏神て今川を氏とし駿河国に封せ
られ世を経て範氏と云其子則了俊之範氏世義之織田に敗れ尾州に戦
死し其子氏直に到て国を失ふ其孫刑部大輔範英と称し徳川家に仕へ世々
高家と云ふ仕（源子孫と勝と其嫡冊位を義茂と称し従五位下侍従に任ず
西別乃探題として筑前国に居る（傳云応安五年三月第九代武教了俊と攻て克ち七年四月将軍
義満西国に入て南地を討ち七月武教降る
第代巳世南朝に属して忠功の於是始て降る）了俊（傳云来て政を無ふ
用ん事と責るとも）乙是に怒り筑前国に立ち大内伝濃
古氏親伊豆氏弘大内重弘是に注ぐ了俊宴を開て傳云了俊酒を嗜む者
是を餐を又来て氏久公の流れに寄に従者杯を寄て酒を出さと
すとたちまち氏久公の長牧二郎三郎脅刀迫を素戒の神と杯に掩て捧む酒跳
散る消て席上に散る流其刀を抜して無ふ
厚情日に加ふる了俊小武冬資（小武氏の伝氏久公正慶二年の伝
ひ南朝伝説大友小武の二氏

九郎牧伯の長をえて称し と悪む 氏久公と云て是をとりこむ多賀高重
了俊に見出て了俊力士として多賀と席を上に勢し
按に本朝記冬資建武中尊氏に属し菓地と戦て教章を菓地
降る多賀以為我家世々将軍に切所の必賞りうんと菓地降て四郎と変を
其威冬資加右に出り多賀恵て了俊を師て生葉城を陥まこ一族與党七百
餘人を教化と云愚按に冬資死して後菓地等生葉に拠りて了俊討もろう
又氏久公とて高麗く是と云 氏久公穂を庇深て四
公穂をもんを戒家して家に仕へ 公四郎と号して此もろう
家冠して了俊を士恵と四郎と名付給て了俊
る本田氏親 菓地氏弟 嫡子入る清乃士拒て 氏久公一
人と通まうんと庇穂の次番と 公に従て寄入る今川
士拒む事なく了俊酒を勧て小貳と
教をもと語 公和て庇に告て四了俊寄んの小貳族
了俊に戮せて是を討せん庇四国に帰て海に沈ん 公
も使を遣て了俊に告四足下教をして小貳を討て
席上に教を小貳の為に心を砕るうり是を上国
必ずなりて了俊為に拒とを上むるのあるべし
傳云此時西品に人恵て了俊と悪む 将軍に聞て故に除せらるを京に飯
遠州に蟄をとし按に此て了俊今川恭範と隙りて恭範了俊と将軍義満
に語を大内義弘探題たらんと欲を菓地了俊と探題を
志んと欲由是交相語る義満怒て
法病すて朝に詣る義満怒て
封国遠州と案に故に遠州に蟄とと云

嘉慶元年丁卯　永和五年二月廿三日康曆と改元三ヶ年二月廿八日永德と改元四年二月廿七日至徳と改元四年二月

廿二日あり　寺と法元　工志布志て生て後席児為東福寺職終ぬ

居らんと欲し禅を外して終に乾を壬の月冨蔭

加賀集院に業を嘉吉年中六十歳為玄久と謚し

那也院　志布志　より義教　那也院は大慈寺二世開中関基大始良就的　公乃墓り京都那宗院に公乃神主と

那宗院は東福寺の内にあり武云那宗院は

氏久公の墓所武云剛中院立るところ未詳其是非矣

卷之五

国立公文書館
National Archives of Japan

西藩野史巻之五

元久二

氏久公の長子毋を仲集院忠國（長門守と称す）入道乃恵女
貞治二年愛所瀧別大塚良城に住る又二郎と称
後藤寛忠と改し　氏久公に従て日向志布志に移
里又庫四人為赤福寺城に移る城地狭少なるを清水
城と築さ（大真寺治山と）是に居て（至徳中に此を本城と云貴公に曰く移是居）往慶地城
ちかくに有るの古い城の口城（吉野宣言なり或云此清水城主厳十二間雑賞所馬屋なり）
永慶元年下野

西藩野史

国司[illegible]民久公に絶て[illegible]川 是と第七世乃太守と云
四濃四年癸酉 如慶三年二月九日康一階と改元二年二月十六日明徳と改元
之是 仏久公薨して後世子上総介田久 法名文判官と称す 和三年二月朝日せり
後に除髪して久哲と称す 藤州数年と傾し自藤州河毛城に居し
也子太文判官 伊橋摩守 守久を本多横出 子山城忠朝を
後山城 平佐 [illegible]守久性温厚にして父に違ふ
後に仏と帰て父と珍しく訴る 元久公人と為して訴を
[illegible]て父子相異ふ道乃大なるを天神に異夢久
[illegible]久に悔[illegible] 父子和睦して後田久に収る

已に[illegible]乃 忠久公の甲冑 按に数百年に至て其形状を故京保中
小十文字乃太刀 源家世々傳る処藤を忠久公の傳に詳なり田久 徳豊公に命して更に似せ作らしむ其
元久公武[illegible]に 五[illegible]に 守久に[illegible]田守久公
[illegible]なり 結の[illegible]に[illegible]
[illegible]なし[illegible]乃 懐なり 於是 [illegible]
山田 右京亮 一説と云 田久 家長と 河毛に出し
て是と交しむ 田久と文河 一説と云 河毛氏長先
公の懐と交て伊勢国長田左と 大和守と称 忠時公の六男大炊助久時に出
傳る孫藤 加羽月に住し 石塚 家長と云 として授く相承して
田辛兵乃授受 氏盛に 輕忽く仏る 田中に居る

遂小授受志ゝ（松尾南塚の南）帰る　明徳五年七月九日

応永元年　甲戌　応永と改元

備后尾　石尾八田集院長い寺忠国寺十三ヶ寺の内

建仁元年六歳にして田集院廣海寺（泰平山廣海寺　本願甲刹の一に南山南中八石尾ヶ寺の末寺）に入て学ぶ延文三年四月洛陽に登り南禅寺蒙山（南中の外と称す）の弟子となる　永徳三年十六歳にして僧となる　永徳三年癸未三十九歳にして紫雲山国泉寺に到り遍幻（豊松）のく に見て法を受く至徳二年乙丑四十一歳にして国に帰り妙通寺を建て国之

応永元年福昭寺直林寺と田集院に建て初祖三ヶ年深固院と薩州吉利に建（文治三年福昭寺栗崎に移す）

妙智寺を建て又恵龍院を建て国に帰る　応永元年福昭寺を建て又恵龍院と建て国三十年五月十日丹波国永澤寺に卒す年七十九〇按し通幻道元姓八源氏洛陽の人始建仁寺に入て明庵に師事して法を受く高倶に乗り宋に入り天童如浄禅師に見て宗旨宗乗有て伝て飯る城南深山に移て法を説く北条時頼石せも適ん越前和尚永平寺（按に永平寺八沙門行基家基）

（永平寺と称す）（平寺又曹洞宗）（両本寺と称す）

建長六年八月寂す年六十四

遂に　元久元に就く　公是を恢し府下に帰る　府久絶ら

居を信氏寺を建て玉龍山福昌寺と號す　石屋と号す

居を志田郡大須と新す（日三年十月鹿野谷高坂下池と新す　日六年二月谷山宮新新）

小原氏（按に所生氏の祖先俊の子右京亮　池て小原氏と号す　竹沢氏の伝八　負久公延文四年社侍に生る）

真幸院と称す　伊集院氏と共に日向を乱る

事八延文四年　応安三年に生る　桐良氏　実長　是と諸て日州中に天台

桐良氏　実長　是と諸て日州中に天台

城を取る是と深川に於是　文久公府桜山に軍し是を焼

文久公　今川播磨守　今川了俊の弟　伊集院氏と共に　基く中に天台と

今川了俊の弟　伊集院氏と共に　基く中に天台と

按ふ日本長つる　桜山の主　和田左衛門　日向高城の主　天慈と戦て利

りつ城に走る　天慈信は　新て桜山と戦ふ兵粮

表裏し小弐又次郎少貳伊東祐光と戰死す
元久元乃軍延長高に接して是を破る矢部大
掠掠し僕小弐を山東に走る 二月十七 七月 元久元
軍を進め中矢部を襲ひ敵に奇して溺る千田千田
桐良氏有名士 竹下弾正戰死 是中矢部と掠山矢濃守
嘉久 掠山氏 二世 掠に嘉久教宗教久満久長久廣久善久
七世太永元年に至て傳頗以其間百三十七年
私云天文十三年少貳忠相伊東北原二氏を嘗て掠取る処乃地を捲
其中野々義谷竹乃大永社掠又二氏掠取々々
二年乙丑
初北原周防守範重 世々日列志章院と称す 桐良伊東に與し
貴久乃傳に詳なり

故小桐良逝ぬる為後 桐良氏元久乃
服後國求賞の事 長と真章院小弐と少弐
氏と称し七年範重 祐形 或頼照に作る 濃海城
加久藤 小弐を幸と論して合力を怒て和利し共に死を
なり 前後の事
於是二氏交を以て左馬頭久重 範重 元久公に降る
公是を賞し軍を責て桐良乃軍の志章に左を進め
真章院と称し今久重に賜ふ
二年丙子
正月神 元久公濃谷氏と泥ちん乃為薩品高牧に軍
次 七年十二月 進て清水城 梶郷城と梶原入来と称す
と云入書院氏掠乃 と問む 正月十日 入

本院深正丈殿手取橋を桐段前後に清ふ援兵未至
らちあかし味方る重兼茶田に走る　公を追ふて是を殺る
十言 文字化堂 擱佃之門 を取る是桐段氏か援兵至る　公軍戦
進みて花ふに戦ひ大に破る主将吉田氏を斬る傍ら
亦し数百人を殺ス　公の軍も亦覚敗し軍を班ス
程帰て清水城を滞る 傳云高城と花山寺原に戦ふ其事不詳
四年丁丑
元久公僕大兵 五千人 を揚て清水を攻む上総介久入道久哲
河辺城主 播磨守守久 久哲か長子本多化城主 伊作大隅守久義 伊作家四世 新納讃岐

守實久 新納氏二世志布志城主 本田信濃守忠親 隅州清水城主 軍を率て
公を助く是時是四軍に分ち　元久公ハ其頭に有り久哲
守久久義ハ本城原に陣し實久ハ吉福寺に軍し忠親ハ
西外に陣し攻撃す其時忠之入本院重兼を伏て諸
応永十八年久豊 先是谷山郡司公入道 世く谷山主たり傳云貞久公の時従ふ出何 国命を奉せ
清水城を攻む　氏久公自島を伝へるの時庭に寄して庵
田氏を教へ其を地方人をして御所に従ふて旧市旗
を帥て来て自刎を懸川城ホ庭に寄させるを暴す海
ち為に来て庵児島を守らしんや仏に往使を好て志気

所生 二の為に来猶幸とも称す 乙軍と相戰て及て死
もして谷山に奔る時数に 氏久公世を終りまして谷山を伐
元久公に至て猶従て数に仕へ帥て是を征伐仕
軍終て逃亡 按に谷山氏其先兵庫頭忠光 忠久公の時に南北神
谷山を領して今に到て二百餘年神て滅亡する
谷山氏代々 貞久公の侍厨元
二年に死する孫次郎右衛門 はとなり 給黎掃部 世に掃部氏某を領し其先相州平次
郎太夫道良の弟三郎類姓三郎忠
長の孫之世に侍仕し言に至て除せらる於是奈良氏と
掃部に対し大宗奈良氏の事 久豊公侍に在り 風を称て津々木田伝藏
忠親 岡田 より 来世て岡老職に任じ 山野原有 に日門
走りて報を又三郎久照 伯久公道久祈禱之北殿と称し神
元久公に養もてるが故変し を立て主
軍と為し 者市志を侍と新納 新納氏なる賓久 志布志
主 右馬場に別て

門を踏て戰ふ賓久此度より 黎に帰して 忠親と称する
親道を以て 隅別に走る賓久 軍無田氏 野辺薩摩
其に弱冠に 従也 兄八十九 子八十六 平素義と 嘗む又 家を有りとる
元に出て 戰死 是 戰死 二人と刻と 宝満寺 秋山
密教院と号氏律宗 南都西大寺の
末寺 花園帝正和五年立て 乃門 立川 今の宝満寺 忠親 隅品
に帰て 左四と 隅品 畑の主 畑の主 是に 戰に 相共に 横
川と 侍と 横川氏 按に横川氏其先平清盛の 安藝守基盛の 左馬頭
行盛乃ち肥後守信基 弟三郎 蒲田左衛門尉時信と称す
義久中 神て隅別横川と 領し 国に氏 氏九世の孫
河内 於氏に至て其後 詳に 氏 後小原氏横川 氏と
新 族数人と 敗 氏の軍 大に 戰 忠親 力と 僅 より

信濃

きたく使節に走る 按に忠親除爵して安芸と称し 元久公京師に到るの時安芸京師の邸に居る 河田平田氏に因て罪を謝し 公見て見る又去て之を
後と称す 元久公忠親の兄 後信濃守元親と称し老中に任ず 及び其族臣と石て出家歌
を詠して帝に上る 既に亡命して去る 河田氏の動靜
ある事歟 忠親の父 新に死もする 元久公の使に出 京師に入り 故に出入
清水に射て 敵長木忠と謝し 出入を乞て清水に返る
十二月 伊予大洲守久義帥と帥ひくどうめさ川を渡り
関新川 加世田 美作村 と軍し 利府氏 薩田氏 と戦ひ別府逆
戦て是を破る 久義 按に二階堂氏 其先文永中相州より来て所を和方 宰たり世々是を邸て波磨取の守
と号す 按に二階堂は久義姉文之妻 別府は妻の
に 形を聽らす 二階堂の姓に別府と暫せり 久義 元久に求む

化る 自ら来て是を卿く 十月中自相模氏氏の武士 外戸屋北宮ら是に属す 於是日く戦
を桃を難い 清水を少せり 清水十月新納帥の部 元久公の受に清る飯
戦死 敵死を敵又神崎山に攻入 公の軍亦久哲北宮と攻破る十月十日又千町田に云戦 元久公
薩田重盛を論し四人を戦軍四集して敗る 色とらし 孤城又
永く保つ 誓て薩田を 薩谷氏に 世へ使に射る
上 谷山の地 を与へん 清水山村六所 今の北部 と射し と云 重盛諾を城と下て
義州に遁る 薩谷薩田を 薩谷氏に 薩田に受
哀憐す と云 元久公軍 城頭を
十七 資未

元久公師ひ日別に到り海江田（伊東氏族）味方の新田部浪人の実
久ひ為り海江田を山本の要地に放て城と為し籠り河内和泉
を以て是を寄せ来む北畠川南（穆佐三郡町池尻郷）伊東と報て元久公
に屬を給ふ穆佐の久俊（文久の外叔父なり）を命して日別を攻て久俊
位に為さるん婚を更に久豊公（元久公の子なり此時薩州嶺城に在り数に南
に帰ふ事い在永二十七年に詳り）小命に久豊公師日別に到り穆佐小居し
尾に来細江に三城を築き日別に攻て伊東大和守祐安
久豊公武富と為を如き是に嫁し七月唐浦乃更と
結ふ元久公を命を為して要ると怒る是り

公人として久義を諭しく四軍を解て伊作に帰り武
日と為り聽をんい市て接を久義出ますと
河を以て軍を弱を見し久義又二階堂と使り
（海久義兵を文久公に請ひ二階堂と軍を事い在永十二年に在り）

七年庚辰

正月元久公別所庭院を鹿屋用所を書記（後除髮して玄蕃と称ひ用老と伝ひ）
に賜ふ忠恵甚大所宋氏の話り（所宋氏五世河内の孫名子三子英宗世て鹿屋と称氏）刺と
庭屋に活て関く氏と人中沈除を為る是に為て女に活ひ

八年辛巳

九月熊田刑部丞直経成世爲熊田と称し渋谷氏の一族と離れ
元久元に通ずるの日行事 按に永和元年重成 氏久元に通ずる人を以て二十七年独立と離れて孤立ともなれば或は族著和平
此間を資 渋谷重国是と密に渋谷
詳らかにし 渋谷荒重しと男渋谷八郎重実
来て或は 蔭別を以て因て以氏とす
車間と称し 入来院氏 知ずの示 和泉車間 渋谷実
重早川
熊田を囲み攻む上総介久人通久哲渋谷と助て萩平
小軍し 按に久哲是なり 元久元と無し 或は已師久元世なりて三年重綱と 元久元に懐て国泉に至なき如しと云
元久元熊田の忘れざるを三の所行と幸し駿巣神崎
山是と熊田 古城と云 の軍し熊田と接し 九月五日 久哲軍と吾福寺
接して是に敗を渋谷又接と蛇塵る渋谷相良前後或は
久豊と乙と敗を於是渋谷氏細江城に投て久豊
乙に報ずに加担するに通ず 熊田を則 元久元に告て
乙福永紀伊守細江に出て渋谷と助く 久豊
乙怒て攻る城乃軍と帥ひ細江と流る渋谷福永終
戦死を 久豊之を熊田小太郎 綾部殿戦死 是より日別大に乱を出来河内
熊田為未掠の南を拓縣国岡駿部に巻る 久豊乙に報
き 元久乙の東派と為す 乙即日別に新よ宮浦国浦を
巡り独小代大河と渡り豊乙に跡 久豊乙八細東祐安
と共に大軍と辛ひ綾部元源利 飯田と張屋

原細川勢是れ日に軍し無勝大に振ふ　元久公人
と雖　久豊公に従て日向肥後肩肉の親兵を率ひ以て我来
虎寄先を（久豊公の子那忠國　公と今年五月生る）
なるものなりと雖も若しして是を見るを得ざるの軍を期し
て骨肉の恩を全ふ　久豊公後者として初四人を　元久公
は深く之を出る出発　元久公席四人高に進む
十一年甲申
西州の探題渋川氏要の牧仰と肥後國二郡を与へ新
納敏後を賞久　元久公に代て之に親と播州を守久満谷

氏と又云して席上に坐す　実久席に進む甚上に坐す
渋谷業満に議して曰実久高席氏の威を恨て我業を
義如を他日の去必其上に坐す　実久今を妓
是を和ふ　ひろ是と云
氏（渋谷の族）　為て実久に告て他日実久出る白相原
坐を客に出ずを彼を上に坐すに坐すんと主客色に
見る相原と云る前後（求摩乃主）　記て相原を引て探題代下
に坐すを以其下に坐す　是実久又事を謝を云
事出ずと為て国に帰る

六月将軍義満更に　元久元年を以て日向大隅二州の守護職に任ず　按に此時三州争乱久しく中伊集院氏日向を奪て之に組し新田と称し故に更に二州北守護を置て　元久元年に任せしむ之を　此時薩摩伊久入道久哲国職の魁首たりしを以て二州北礼を以て之を招山出雲守細小次郎主税助　所信多寺　に書を齎して西州に赴く　本書曰為一石字不勘及合戦之云何概の事儀式雷霆所詮止雷霆就之儀和睦殊二致忠義也云云　如や仍執如件　島津陸奥守殿奉行　時に豊後太守大友親世と又吉弘左馬入道と白旗に従へ出て和を　元久元年に動む　乙大慈寺　左衛門尉　法号して是を治す　和歌を以て世に詩歌書りて　知己を命と為す又蘆別に記す　傳云朝山右衛門尉と出て隔易加治木に到り加治木冥利に於て是を殺し加治木の族高山氏連歌を以て喜と云　久哲に従へ

宮に帰依し在り死　私小宮を帰る　傳云朝山帰りに及て探部に遣る死骸は国海に到て殺す是人祭て一の嫁天神の東北の神と云

十二年乙酉

伊作久義二階堂氏と接て喜悦す　按に久義嘗て別府を攻む　按に二階堂に和む　藤氏　故に久義是と志む　久しく怨永四年に出る

義して曰二階堂久哲　久哲は二階堂氏の名　嶽寺忠朝　元久元年に結て禁戦たり

相共に力を戮さを審かに久義の為に従て是を征す

と仰て久義と仰て久義大に歓び出て愛しくして

河内北方　即田布施　と攻む河内　敵氏候を伝一説に三年に在　別府　別府氏候を伝来和元年に在

相結て二階堂と拒む　元久元年を以て是を戦ふ

十二年丙戌

二月　元久公河内別府に桜長と称する二階堂桜乃破を造り

と号して落と称し河内小方と棄て市来に遷る　桜に文永中二階堂薩摩守

相州と云て新に称く波磨殿の子と号す是に至て平始て除せる　於是　元久公妻　五代木工助の子　と志布志

に遷る　河内小方に居しかば老臣　と平と辛と　傳云落に云

如と云し伊集院久実の子四郎高府　伊集院六世

指久に妻の嫡次男曲家祖と指久に賜ふ

十四年丁亥

元久伊集院深田郷新人　伊集院六世　元久公の妹と号す　伊久入道久哲

を城と称る　傳云新人郷方の中と称る城南の山上に多く棟札今存す　鹿

児島城の係りたる河辺を

元久公に新しく已に平佐に遷りて忠朝に

拠ると云親加是なるべし詳にせず

平佐城主　に富を五月　日　久哲病て卒す　享年一　心日　元久公軍

と称て平佐城と称る忠朝逃亡す　傳云此時左国司領　悉く元久公に帰す

十五年戊寅

元久公隅州屋久島薩州永良部島と種子島清附に射て

拠に種子島氏其先平相国清盛の次子安芸判官基盛の男左馬尉行盛れ行

基に出る平氏滅亡の日亡命して薩州に北条時政に因て赦と得養子として為り

相州鎌倉に居る時政将軍頼朝に右て種子島に射次国て氏と氏治屋久永良

部の二島と加封せる七世孫泰盛馬守頼時　氏久公の為に肥後国に戦死す清附に

新時の子なり二島を除せらるるなりと称く此時に至て復封せる　久豊公

此時薩州硫黄竹島果治を賜ふ永享中九世時長に至て二島八除せる十四世

時堯元　日新公の女尚氏天文十二年四月従五位下に叙し弾正忠に任ぜ

義久公の史人に十六世に至て久字と賜て久時と称に是より世久字と賜て各と

十六年己巳

九月十日 將軍書を薩州に使して薩州より 義久公と薩摩國を護し刺し（按に去年五月將軍義滿薨ぜし義持立つ故に更如是歟）

十七年庚寅

先是將軍使を以て 義久公と京師に上る故に伊集院頼久先立て京師と京師より迎ふ（應永十四年）

お見 公國を出て京師に執る 横山教宗（横山三世 隅州平良の主）

小田を知る 北郷氏は世代二人を一族と云

河内守 老中也 揮宿北の主 北二人と所同と云

小原久兗 日州真幸の主 少弐氏六世

惣平 右馬の頭 隅州加治木の主

加治木 隅州蒲生の主

蒲生清寛 隅州蒲生の主

肝付兼元 又八郎と称ず 隅州肝付の主

肝付兼元 右馬の頭と称ず其先武藤七郎の四代山業の子 武藤様ぜず 肝付院と號す 又隅州肝付院の地に住ず 又隅州源四郎 ものの志命志に居ず

城肥某 隅州廻城主也 城に或は廻城 氏と云 普久公の侍に出り

久豊公日州穆佐院に下り伊集院和を放ず 久豊公

新納を以て日州穆佐院に下り 世に日州志 本志の文

志布志を命して堅く志布志と

志布志の要と伯に隅州に所に日州津に到り 拓と云

志布志 久豊公忠義に到り 元久と

四波見を賞する乃ち其事有る所の義 然らざれば則ち

少て四賊 廣に京して國小 寇を志布志と 我為

に日州を奪と 久豊公薩と諸と慇懃 情者

同じ家なりしに 作田此時 久豊公鉄 叛逆 元久公既に死せり 元久公既に死せり

公の伯父集院頼久 義に左右松満祐 播磨の大守其先赤松則祐に出り 初祐に出り

うなこと義則と云事なり則 満祐と仮称して国家を

将軍義満に猶し 俗云大守義俊と云事長野九郎二人馬に乗て赤駿

祇に接に大守の国光世に庶四郎草牛田邑と称し長野

氏後裔て播磨に居て紀氏川上伊集院新納町田伊集本田の八家と称して江州神社

祭の役に任じ且 太守公茶礼に役をつとめ故に 重年公の時石州を以て廣下九士

上りる○私曰茶礼役と云茶礼職事なり本田氏を太刀と執る桂原氏馬と事之

木蘭氏は燈灯と執る中村氏幢と執る長野氏書炉書合茶筅茶入茶板茶筅

湯桶湯入匙茶瓶燭臺下火 松明 従長義京将軍を狙し於長

茶帛掛を奉し 播磨氏天蓋と執る

従長義く友に叙し所謂桂山教家安藝守小弾知久

中務大輔 河内守加賀守 平田重宗 赤馬 加治木義

平田肥前守 義久河内守 肥前守清宗 長谷 小東久 左馬 坂

肥前 伊集院守 新納 薩摩 に任じ 元久公京師に

帥に高し 雪情日に加る

十八年辛未

公河内国中濱 氏大に蜂起し 元久公京師を捨て

帰し 或云 公伊勢太神宮に詣り 祈て伊勢の国に帰る 大軍を発し 鶴尾に陣を

稲富京海 稲垣 川瀬 堂東 松浦 四数十騎 ケ所に寄せ 清

久城 喜谷 堂入 本院 氏 松ら 公 俄小雨を潜く起しかたりし

国を解く 鹿児島に帰る 是歳書を終る 記し 庫六田

清水城ハ慶長五年ニ十五玉龍山惠燈院ヨリ築ク松ヲ築ク北麓辺ニ植

今樹為ル如之ハ玄忠大禅仰ヲ崇ル二男八女ヲ有ル七女八尼ト為リ一女祖父伊久ニ嫁ス

男ハ極寿丸ト称シ石屋ヲ云下ニ入ク僧ヨリ仲和

ヲ号シテ先是応永二年東州ニ就ク

寺ヲ国分郡ニ立ル太平山常珠寺ト号ス天平八年開基二歳ヲ以テ福昌寺ヲ世代住持ス

延長二年平厳ヲ以テ開山ト為ス湯州大塔良ニ立テ宝院山金粒寺ト号ス文安二年六月七日此ニ

於テ遷化ス或云伊集院徳重村ニ終ル未是ト詳ラ也

吏ニ嗣ヲ

郷頼久聲云シテ曰ク　之久公遺命ヲ受ル神社代

ヲ為シテ嗣ト立シム元久ヲ

揚ク席下ニ入リ拝ス之ヲ　侍云此時新久ヲ軍事福寺

実方清水辺ニ元住ス　佐ヲ

伯耆守親久北郷中務大輔知久桜山安芸守教宗吉田右

捷守清正蒲生忠濃守清寅伊地知民部少輔等有儀

シテ之ヲ久豊公ニ告ク　日別稚佐ニ立ル　之大ニ怒ル軽薄ト詆

テ鹿児島ヨリ　侍云佐多義捷ヲ佐多家ヲ称山伊賀ヲ未ダ知ラズ

福昌寺ニ葬ント欲ス伊集院神大ノ代　之ノ神主ト号ス梵識

ノ祝ル先神主ヲ奉ル之ヲ礼ト云　新久ヲ元寺中ニ元ル　久豊公憤激シ堪ヘ

自神主ト為テ葬礼ヲ修ス新久大ニ恚ミ伊十

院ニ帰テ報ス福麿守忠久出水ニ立山城ヲ忠朝永利ニ立源ヲ

崇ニ通シ力ヲ戮テ乱ヲ為ス之所ヲ為府久也守久ノ新久ヲ

もて四方を攻め我祖細川久乃居城をうばい其外に是と云ふ
ところ相相〳〵悪敵を滅ぼし勢を振て志を同ふして
敵を亡ぼして思ひ給ひ更に武くを示し給へ
彩久藤の久世の君に移る故是嘗て大に国中を乱
る

国立公文書館
National Archives of Japan

卷之六

国立公文書館
National Archives of Japan

西藩野史巻之六

久豊公

氏久公の次子母は佐々木三郎左衛門忠光女永和元年乙卯庶兄島津伊久三郎と称し後に修理亮に任ず　元久公に続て三川澄奥守と称し

応永十八年辛卯

所生の母忠光入道玄蕃と帥て鹿屋志永十七年　元久公老中鹿屋用房忠光入道玄蕃に賜ふと謂ふ庶兄入道玄蕃を久豊公に告く

公大喜と称し庶兄為と為して市城に祝す　富若狭守清正

蒲生義俊守清寛廻伊豆守
敷根某等是逃ると云

先是山田加賀守忠経入道山田氏五代 拒
兵を率して席屋と称する蒲生冨士を分て撃破れ
山田孫四郎等戦死に按に忠経は古宮冨士川
高瀬両村の軍と記せり蓋し此之辺乃至ら
塚川 久豊公是を聞て忠経を責めしに
来謁せず 久豊公軍を進めむ蒲生の勢ひ
解くを去る大蛤良の城軍 鹿屋を拒ふに舎て戦ふ
鹿屋を攻む蒲生又撃出して攻む蒲生大に敗る沼
小路に死する者百人数ふ蒲生の二族某九郎武弘
女婿等戦死に 猶に奇して
[illegible]と雖も前級沖田を滑て降る捷書と 久豊公に賜を

公下大隅を巡る 傳云此時久豊公山田入道を責て始軍義久
元久公に賜る 元久公に賜る 岩山城山田五郎別府五郎と称ふ○按に是も亦該数十年と経て弘治二年肝付何関る蒲生
後鹿屋と称る一族武蔵守忠経を地頭と云ふ肝付氏蒲生
清年相模守忠仍是と称ふ
作て居所と云ふ後降せる

十九年壬辰

伊東大和守祐安日向霧井城 傳云霧井氏是に拠る 久豊公に賜ふ と国を攻む
椎山城藝守教宗小々中務太輔宗久 三俣高城の宗細如海江田代軍是に従ふ 霧井
を拒ふ祐安公に逆撃て是を破る教宗宗久敗て高城に
傳云俣名兵部大輔義久 佛と称して[illegible]を拒ふ為て[illegible]と云
戦死に 久豊公霧井城を
と称て城に到る城に到る歩の国家の者に於せると情く

其四人決るなりと云て父子の約を結ひ次席三郎父の幼字と云ふ又紋と号すと云也
名乗を席四郎為永吉邑十二町と称し所に城を築き城高塀
に入る根に示し火を放て西城れ門と称し城内未だ堅固なる佐多氏義長
根原等戦て甚困りと云 敵方敗北 久豊公に告て曰事既に急なり
敵乃其路南を塞しに其端を遮て所々に後を防ぎ書
夜四方に出て知恵夫人但妻安 及び二子長男惣領次男薩摩守用久と 軍を来吉
遁しむ 久豊公之を聞て又席四郎為に命じ伊集院
川南川小路に
二十年癸巳

十二月濱谷氏隔別に怒を久豊公に泣訴んが為
所々に陣を張り席四郎為を攻しに先薩州吉田に到る十二月七日
吉田義長吉正吉田北郷 豊州に赴て伊集院新久盛に
新城鹿四郎清水城に籠る 城中に在て応ぜざりし
寺の城中に在て応ぜざりし侍三郎久俊と席伊為に寄せて用意と称し小弟式部と共に来福
於是新久兵を発し 城中遂に自滅し新久
火を放て城を焼く城兵皇礼を尽す吉田義長伝云
泣二郎三郎佐多二郎九郎 幸夫人
但是太刀為等城中に戦死 竹と称し
弩備を或云清貧にして兵糧に乏し 火を入れ竹と照を賊に見せしめ
皮袋用力絶倫太刀を振て防ぎ帰て

終小浦る賊又来福寺城を攻く七日夜 赤松軍と合て清水
城と辛くも相通ずく奈良小野に在り 久豊公高
に在て変とりさ密軍を引退て赤松を討ちんと
蒲生清寛吉田清正諸く田赤松大長と新一底四方高と
暗し 無数蜂蜂孤軍是に向て発一時に攻に寄り
撃て傳く軍を軍方る石一要まりと為て是を撃ハ
清寛ことごとくなきん 久豊公聽を経詩と遁て
直に底四方高に帰く頼久脱して奈良に寄り佐多
伯耆守親久大寺奥能寺 川上長野 小奈等 当時底と要て奈福寺城

に寄り 久豊公流訪神と称て清水城と呼り 清水川 稲荷神前に流る
と称て侍衆と寄さく来福寺城に入く小野奈良を討ちんと
寄て下大隅及び西海の底和と岩下浦に寄せて 乙丑
云を 谷山乃軍と又引る 久豊公賊と称く奈良寄
十二月十二日也 伊勢の賊赤久と鎮て田畠を築て守り に拠り川田之郷
太郎 義清 或云或清か父義拙と氏満家院河田氏を 河田氏傳 忠昌公文明十七年に出川 是と郷り拔り
開ん 矢を発て賊を逐ん 久豊公 乙亥 京軍と合く賊と拠む 乙の軍
義疾く赤久大に洗て死る 傳云赤久の族田宝肥前守町田大炊
久是く奈良異と保川 大田三郎等粉骨砕身赤久軍敗北人戦死と云 乙丑進く是と国を赤久遁

に途なきを見て自殺せんとす右兵衛尉清定蒲生清實
乙に告て曰頼久羅萬死賜ふ小生ら〻い〻と正しく〻と乙乃
外戦〻頼久り潘家死賜（元久乙母の弟久の祖父忠国の女なり）今是を殺さゝ頼久年若の男
と感〻〻家れ蒲屋を乙に従ふ教久罪を
謝〻〻国集院より迎る神教久年成象をもつに及て老長
野国入道乃妻を〻誅〻不可なりとて教久を以て老
老色なりとて道妻五子を以て又父を言と老色なりとて
に乙て神〻伝を
二十一年甲午

八月久豊乙帥て薩州給黎を攻む（此時給黎八田集院教久父子山
城守の父祖にて年記考）
（故に沉とも云）頼久按て伝化大隅守久義（久義神て教久に教さと 海津上
伝久豊（河辺乃宣）より飛む二人是に応〻〻苦〻〻知られの大山
を敗て松平氏平（共に給黎
北地）
本田伝張る重恒（国老）を以て久義久世と破る（傳云田伊が世上原氏以下詳多歟不考本田
ら敗北帝二郎
大隅等亦死）頼久寄進て城に入る（或云此時求磨
ら接兵刃）久豊乙を以て弱通
ら城色に乙て誅に列ら攻ち撃しと〻教久四〻〻
給黎の地を屋や指宿（共に久豊
教久父令給黎
に属す）に問りて〻く保ち
〻〻牧只知る人（教久父令給黎
長門守久俊歟）に藩ら〻い〻と大山乃

淡有て之を[illegible]の義接に[illegible]と[illegible]に[illegible]と[illegible]に[illegible]て通まと云う（知光河色[illegible]）[illegible]下形吉と和泉又[illegible]と経て飯う

直久（侍従[illegible]の[illegible]して[illegible]）上杉吉と（二十町）大寺英[illegible]元寺

（元久公久豊公に仕て[illegible]に住）長野左京亮に[illegible]久豊公鹿[illegible]

[illegible]と懐く[illegible]久豊[illegible]と憂ふ故に人[illegible]て

上総久[illegible]て[illegible]国[illegible]に[illegible]なし[illegible]の徒

に[illegible]と[illegible]好を[illegible]吉[illegible]相[illegible]

[illegible]に[illegible]久世[illegible]

に山城[illegible]家[illegible]と[illegible]て和と[illegible]

久豊公大に[illegible]と定め平等寺（[illegible]）に云く新久を

[illegible]と[illegible]に[illegible]公[illegible]と[illegible]

新久一[illegible]と[illegible]く[illegible]と[illegible]

[illegible]大に[illegible]る吉田清正[illegible]来[illegible]殿[illegible]と[illegible]

[illegible]て[illegible]家の民蜂起して新久の[illegible]に[illegible]

と[illegible][illegible]久[illegible]を収て[illegible]

二十二年乙未

[illegible]久世に[illegible]て新久に[illegible]（侍従勝久）

[illegible]久世の[illegible]に[illegible]に[illegible]（元久公の孝[illegible]勝久の[illegible]顧に[illegible]久の[illegible]）

[illegible]久世の[illegible]して早[illegible]（元久公の世と[illegible]）

忽病て田舎人倫の道を肖ず終に久世を殺めおせて
久豊公に落る　公是を都に召て久世に云ふ歌を
与へて殺る又久世を流して庫四人番に招せしむ
二十二年　丙申
伊予守久庫四人番に招し前非を謝せ　公和解を
十二月久世宗牧を嘉と罪を是を養を而て堂塔（或云今の内の堂塔）
（堂之古眞言宗
代寺なりしと云）に籠を殺るに及て　久豊公怒を為して是を
国に責て田海を罷あり河内を移して賜て帰る事を為ん
後ち久世宗牧を殺して罷後

謝せるに意なし　福田寺僧大田（或ハ大轉坊に居て是を流す久世
田家既に国虜を為て　我剃士の名合を以て事に為る事を謂
命を以て色の亢に傳て伯を為ん　是を以て河内に帰る中田辞して田事既に為く而て色の妻知る所
須臾を君を離る所を以て　問く辞して世に久世出しむ
文を小田原深正桐田大膳に命じ二人の色に到て命を伝て田
我が死生を以て云を為ん　なるを書を誤して事の是に流（老法
天度見庵天度安房守（見庵）　大に亢を舎して是を激を今
給禄安門を久俊（安久乃至）に示　本国に書に斉議して田河内は

父祖傳然の地こゝ人乃ち名孫をもつて世代遺感なきもの
久世天死と弱ふとふとも嗣子大左衛門 年六歳後に久林と称し永享二年誅に伏す事八巻国乙の傳に在り
と云へり社稷と全ふきんにいのの石可かりんん小田原
四て久世に告く 傳云柳田八止て河色に在り 世人其士を竊むと謂ふ
二十七年丁酉
正月十三日 久世小田原の語を聞きて自殺と知らく張若と妾
し営中に入り殺す 年三十一 城兵城中太郎 久世一族と云ふ詳 右田伊勢
る小田原洋正天辰御二所君田伊勢守今田右十人義と
合ふして死を弱ふ久世奴ちの城を奪ふて去る去る奴共

亀と称ふてより殺す 久豊云怪と大に悔恨して田忽ちさ
りさ久世の所なりんと云遂に除髮して高野山に遁
遁と亀に乗ちて去り是より南方静なり 愚謂く哀哉 世代の年齢
天下と棄ると見る事敬なる誠と棄る如く聲侯と頁て海浜に遁去んと云へり
や久世の逆兵何を二人と知らずかさや惜哉速に滅と謂へ 軍自して君父の死
と接ふ久世本田伊賀守の使と辞して前に死せるの家か
また久世匹夫に行へり此時生と全ふせるもの多し何を勸ふ邪君に
事ふに忠死し英に従ひ命と楽んせされ聽ちん何を速に河色に使し
元長と除ちに君父の死天下に易るなきと知て久世と接ふ衆聽ちん
君兵後容して死に殺んず遅ちし人事未だ定まらず是と命に奉ずや或云
ふ久世既に三世殺と且仇に背て 久豊乙と棄て安に殺さ久世と棄てると云て世く
敢て全恐くに免ちんと故に免と云へり 墨田鳴呼是何と云ふ
無良なるの猶き教に若し墨田鳴呼是何と云ふ殺と君父命の死地と
踏て死生に在るの中に罹る此時に南て家の存亡土の有と忠に嘆ちんや是ども

卷ふへきもの八何まろ卷屋〳〵ちゝん宣式八他日茲に其家礼〳〵
久林亦此命の死に殉くゝ故に君子八雷霆理と以先務ともるべし〳〵

九月大師を岡城河辺に出り老に酒匂紀伊守松尾城
河辺禁に在り 小松〳〵其間二十町に近し 潜よ 久豊公に降る 公軍谷山康豊下大隅軍
と共して松尾城より入る紀伊守〳〵体て岡城と攻む大師
の渋長大に驚き急と兵力に拔て松尾城に籠る
黎久俊知行の罪を糾〳〵来て岡城より入る伊集院松
八伊作 伊作勝久既に久世ト共に降る 久世伏誅して後叛もるを 田布施 先に文公伊作勝久を捕ふ 河内別府山田
乃兵城金〳〵て伊集野領より軍〳〵松尾城を囲む 久豊公
松尾の危とゝり神速に兵を為〳〵て途 祇尾山の口平川に出て後軍

を渡川吉田義捷守清正 薩州吉田北に在 蒲生兵濃守清寛入道 隅州蒲生の主 牧野左京亮 給黎親と永吉の主 田代肥前守久盛 隅州田代の主 中田
伝濃守重恒 隅州清水の主 新納近江守忠長 日州志布志の主 北郷山城
知久 日州知城の主 椎山安藝守教示 日州野〳〵天谷の主 祝寿左馬介清平
隅州振石の主 伯耆守親久 伯耆氏四世 和泉守久盛 和泉氏五世
和泉又太郎忠次 鹿屋岡防守忠兼入道玄蕃 隅州鹿屋〳〵主 西田
伊豆守 隅州廻の主 西田左馬助重宗 山田出羽守久真 山田氏六世 乃び福
薩州鹿野義州牛山牛屋の軍粮を裏み甲を撤て
久豊公兵勢大に振ひ堂〳〵として河を渡り

小海を敵方蓮実を初め侍従殿軍兵進み出て戦ふ
接の勇を見て陣を稲田城に移り（二字不詳）
引き柵を設て是を防ぎ又軍兵を分て松尾を固むる
事し城中食を乏しく日に減ずる紀伊守
として国を出て急ぎ久豊に告ぐ　久豊乃ち
寄地の演説を聞き使者を審さんと　乃ち紀
伊守小笠原庵実を以て使者と遣はしめ石田に賊徒
破る勢を接ぎ使者又国を離して帰り告げ城中
走を議す　伊東志摩守　或書漢戸田に作る　節刀演に接ぐ

陣を別ち　乃真弟を撃ち破り遂に蘆野原に出
柵を破てをまい者く小破まん庭に従ふ又人を出して
乃ち告ぐ却を軍とをして二隊とし一は和泉直久を
大浦久　図に作る　佐多親久吉田清忠蒲生清宣山田久真羅義相
と為し　栗野義久　原本の軍従ふ　蘆野原に出し一は久豊乃ち自
横山教示北々和久新納忠宗稲寝清宗田重宗大寺
長野宗基に従ふて国城を向ふ　斉　十七　直久敵久蘆野原に
下り川を渡る敵久蘆野原に
川を渡り柵を破る進む先登の兵城に帰り後軍兵と

[illegible]く進て戰ふ[illegible]久[illegible]常[illegible]在て勳を直久より[illegible]
に及んで大に闘を奮ひ勢こゝに進て戰ふ忠久第[illegible]
洪に乱る[illegible]久横に示して[illegible]
加へ奉り戰ふ[illegible]死[illegible]
忠宗公の次子下野守忠氏に出り将軍[illegible]氏[illegible]
兵庫尉忠直亦将軍に近侍し○或云忠氏後に南朝に屬し忠直の子紀[illegible]守氏俊と
共に豊後国に在り一家悉く将軍に屬[illegible]
毎に嘆して曰忠氏の如何[illegible]
に非を改に法に　元久公氏俊と[illegible]
式部大輔久親其子直久是也是に[illegible]和泉氏断ふ○忠氏初薩摩出水郷を領し
故に以て氏とし出水和泉守相同じく因僧して和泉守と同中[illegible]吉貴公の
子三次郎[illegible]直久の後[illegible]類姓揮宿二郷之内に封し今和泉と号し二万石
賜ふ元服して因幡忠郷と称し寶暦四年十二月卒し嗣なし弟寢孫左馬清吉の
子小袁安之丞忠郷の孝子なるを命じ奉して忠郷に嗣を因幡　ト称し

蒲生清貞時に国老田代久助　按に田代氏其先平氏重盛の次子中将資盛
の後伊勢房四郎盛に出り伊豆神社に隔別に
来て佐多氏に故有て姓を建部と改む二子あり長は佐多郎久秀と称し次を田代次郎
肥後守道清と称し野峯に居り将軍に屬し故に田代と称す其子肥前守清久亦肥前守と改む其子宗次郎久助形部大輔肥前守と改む応永
弟大輔清久亦肥前守と改む其子肥前守と以て高瀬と称す其子刑
十五年　元久公復田代と称ふ　元久公に代採領に湯ひ
於是歌氏に年三十九歳世を経て家衰微す

伊地知将監山本孫太郎

給藥師寺国　活正名　和田下田雲科等戰死し　久豊公に
因城に向て戰を挑む新納忠長久豊に切り　伊地知忠長
自雄刀を取て数人を斬り戰進来て忠臣の冑を斬る安樂豊前守河野左馬を援ふ
此時忠長にして新納家の長隈石京上井筑前八幡四郎右馬等悉く戰死し
城兵悉く北の利を勝に乗じ城に向て進む
公の軍利なく城に向て
田雲宗百騎人を率し

城冨に寄せ入る（重宗の被動解は五月田場津田踏死す）赤城殺備基の中
西ん〻ちるに城笠脱よ踏て塞ぐと止事を始めとして松尾
城小道を入る新久又敗和を以て　公軍潰れる新寢清忠
清基（清平の子）力戦して死を（梅に二人の墓松尾城下田中に在り又新寢氏二人の為に小根谷に立て因幡堂と云）
新久猶よ宗と　公の諸軍大に勇奮　終是吉田清忠
新久に従て田賀て来蒲生清実と共に是中と東に
接て　久豊公の仁恵を忘るゝふこん甲を解き兵を
休め和睦して松尾乃軍を助る新久田敗く治ふに帰
島谷山給黎とんを捨て命を奉せん　久豊公是後

沖を却是新久軍を収め　久豊公鹿児島に向ふ（或云此時久豊公は鹿児島に在り）
ゆ白俗人と加ゝ兵食よ若しも　法ゝも新久移去尾の圍と解を城中に入り平田重宗
新久の怒を畏る故に謀て城下に出り重宗を呼び戯言して礫を投を重宗（伊勢殿と平田重宗猶ゝ礫を尾
昆と摘に餅なり新久谷山に出て後親戚故舊霜に食を捨て飢を救ふ）新久
谷山に出り谷山給黎を取ゝ松尾の庇を鹿児島に遣る又
鹿児島を清ゝ群長賀瀬して田賀と泥して利ゆ
宗に命を強し　諸軍死亡をゆ河ゆ書よ
又国郡を波よ兵を大に征　新久谷山に
猶よ兵軍に急る敗軍新に駆軍の様と云ふ新

死して子報さんと擬ず心肝を徹して鹿の如く笑
して又と海を奮て敵〻に敵と撃ん撰と云ふ亀の如く
公大に怒り軍を発し傳云老壮を分て二隊とし老小旗を負ひ壮は芭蕉葉を用て笠を為て進む 或
は吉野牛掛と称し或紫尾と称す 桂山に到り又漁松
に拠り佐原乃勝を志賀奮ひ奪ふ大に軍
敗れ城慈見寺に 上り南方の軍敗れて屬し 山田中村六ヶ別所
川口を乱し 久豊公の軍是と撃破り賊敗走し
逃て出に城を固め密に後援を待て其敗
ひ南方に堀内に拠んとす敗れ霸を渡て国清寺に

囲む落とさず 久豊公猶ほ頼久大に怖して四郎
掠奪の地を石井 三十町個集院に屬し と称して罷と賜ふん清正
又練て其を奪て脇肝より出し若干敗を礼
遣長南 公是を聞く却て頼久を為て地を新 豊後
謝して個集院より出る再び敗れ 傳云敗れて南方に飯るとなんて
衆悪言して田河辺に敗れの厚二十日と出て
敗るゆと併なり敗れ軍面と為して云ふと云
二十五年戊戌
伊勢国神戸斎藤久軍を率て河内 敏治 民部 と撃し敏為
氏援兵を以て拒む於是類姻指宿知貞久の為別所

是と相ふ而来陸奥守家親ハ勝久と和し勝久貝塚湯
田中殺に屬し の石路に陣して清久又相ふ久豊乙に拒む 梅に勝久
既に降る又頼久に要して河辺を相ふ河ハ
久世伏誅の振報に接して又降る
是と相ふ然れども尼寄相敵を結久敗る
十二月先是久世清と伏し頼久清を伏して
則ち庭に家して濱谷に又肯く於是入来院清要
市来東市来鹿屋を敗て新城を焼て水利城 薩摩郡山田の内
大石の手に陣し 富隅山城を忠朝に攻む
二十六年己亥

忠朝
殺八代朝
元

正月十一日 忠朝軍を発して重長を攻る重長相
久豊乙に請ふ 乙既に怒て曰汝若小報を為ん何乃
面かりて為や 重長市来に告て曰前罪を重長に帰
と嗤ふ中ふ〜と 相長兵庫助を市朝と亡ぶ
清久暫く日月を共に形く報し 暫書を
公曰彼忠朝と
和して私を為 其言信ぶ一拳して二賊を亡ぶ
遠近伏兵を設る久信と相して重長と和く重長大
小欲ひ彼永利城を奪ひ忠朝相長と共に拒む知其人
求摩 相良 若後 自幸 相に北原氏を殺し 北時切て敗る
河邑 犬太 所の相長を攻る 八月十九

重長久伝いて　久豊公に仕へ　乙大兵を率ゐて三方の援兵と破る忠朝援の敗を聞くや嫡を棄てて走て曝城を保し（後に降るか　応永二十八年に在り）　乙凱旋を入来院重長に与へ

を仕して忠と云ふ　先是薩州桜島大隅と奈良氏統制の用に預り　桜に掃部助　忠久公統制の用掃部助　久豊公に至て奈良氏に帰す　奈良氏治政の道を知らず　驕奢にして下性を蔑ろにし毒を流し民を害し遂に叛して奈良氏を逐ふ　桜島大に乱る　久豊公征伐の戦場に赴て国を守る　乙亮と謀て是を拒く（侍乙公の軍酒匂に立て出る）　乙日奈良氏罪状を以て伯長

しる、侍云日州と伝せんとす故に勇士と共に勇武を志し　七世に及ぶ　於是乙氏兄弟を恥て類婿に走る　芦近侍を

二十七年庚子

類婿某彭蛭城小松に拠て叛き　桜に忠久公の府河辺郡次郎冠房の次子乙郎忠長類婿と称し国を奪ひ民を害せて類婿と譲る其次男乙方一女あり　薩山太郎兼純の妻　兼純の子太郎　後次郎兼忠　兼久公に仕ふ　元久公の府太郎憲純叛く　乙忠と謀て　久豊公と対す　公此に移る故に南殿と称す　応永十二年　乙日州に移る府先て類婿氏の族　牧氏に帰す　又類婿氏と氏とす

久豊公帥を帥て忠と対す　類婿氏戦敗て逃て出雲

肥後の国を奪ふ　乙二男次郎を帥て薩政（後要純と称す）を帥て　乙帰て国を

類婿氏と氏とす　類婿氏傳云此時　久豊公薩政を以て猫子と　薩東氏と兼純を殺す　久公の府左馬氏神を久字と冒て　乙孫に至て山川と帰す　久字を帰て久政と称す　光久公の府国老伝に　世に久字を帰す近世九条久周後関白と称す　絶豊公　宗信公に仕て国老を

或云小牧氏ハ久豊之弟別に在の由近作にて悪と云へ故に数世に封ずる按に後書云日別に領の由類推と云共政に封ずと云大に悖也　云日別に数ゑ応永十年なり小牧氏と誓ハ今之年なり其説攻て破る

田中周防宮原兵庫

云又別府と称を別府氏なり　云其家老

て芸と輔市と彼ちて鹿児島に生て最に軍（志ゑんハ如ん芸に書ちん二人津の命と吉に席児島に移る　侍云別府氏芸より鹿児島に生て云に仕ふ後る云仕支設久の女とより別府氏に事ふ

云加治木

久俊伊集院郡久る国て清ちる　侍云公久俊の嫡と数て清を聽に郡久国清て後可ち

云上木

城に入り久俊と長宣（知次に為に）に封ず　按に久俊芸より数久三ちり長ハ久慶と云子孫寄入氏の居て席

総に住ひ其孫右馬尉久道後下野入道貴笑と云　貴久云に仕て功ありて其子下野守久治入道花節　義公に仕て老中なり其商今の伊賀久郷芸ちる久商の子と久綱と云

其子孫肥前守久春入道云

義弘云に仕て老中に仕ひ其伊集院氏と成ひ

柳川知英

其祖忠光知英院と

侍軍ちる氏に封ちる

伊集院

小野（十八町）と大寺英俊ちて沈ちる氏山田に移ちる（是ちり大寺）

河内敏治

除ちく治ちり河内城にを元大寺郎と奉して未渡ちる

上木場城

久豊云威風鹿児ちして南方と偃をと見く和と清ひ

山田

城（河辺）と棄て山門院に遷ちる（後肥前国高来郡に居ひ又別当寺院薩南城居ひ島国云の為詰せちる小ハ永享二年に生ちる）

久豊云河内

南方治て定ちる久豊云河内を入ち場治と迎ちる小々

加久

中務大輔加久云に棄て田世子貴久云（又三郎）ちく殺ひ　まこと丈人

新納

なり新納近江ちる忠臣如ちて貴久の淑婉容ちく世ちに聞ひ

公可を宮室と造るべしと雖も事既中途に切迫
於是南部氏と中城（志和郡志）より迎て警衛を行ふ
二十八年辛巳
鴻津城を忠親に賜ふ城を保川（神永利より遣て是を保川前に出川）
久豊公南方の乱より帰て是を沼と云去年既共に長
より中て是久公に命して是を撃たしむ忠親 貴久公に告
て曰家運既に衰へ城を枕ひ死を引て
豈此に又此別に走らんや鴻津氏の如きと備へ難く
敵を海に一匹夫と成て一生を終る貴久公是を

久豊公に告く（工藤氏伊勢氏院に在）平田右馬頭平宗国清て曰忠親
職を辞せんと欲す宜敵 工の親戚なり彼今繁昌に及ぶ
形勢を異にして彼邦に走らば其志情もし是を捕へ
其法を宮室に 公是を鴻津に於是忠親出て鴻津に居
鹿児島和泉守（佐多氏に隊り）より沼の邑を射る（是を長相形と云）
物除賞して道貫と称す 其子 頃三郎 伯忠と共に
和泉守に居る（桜に道貫の長子三郎為厨忠氏と称て肥後国に走る
其子元次郎忠成相馬氏と男八郎忠氏と共に北氏の長と成て都城に居る）
二十九年壬午
貴久公又軍を進めて出水城を攻む太史判官日久忠く

守護職（侍云本多忠に入て是と曰く）豊久公に代て蜂須賀を攻む
守久接と肥後国に赴きさに城を攻る
古久紀後国に走る久〳〵かくして幸次於是山門院を相
近紀守亦僕に帰る（桜に相良氏代々世々我国の侍也何様是を賜る詳ならず）將伊能大膳亮勝久
（細川部左衛門）豊久公に属て山門院に走る父久義四男安藤九（桜に戸次）
（数人を殺す）伊能に在り久義の子忠を遣はす十忠（桜に下野守忠教の次男又久義の女を娶る）為人
貪虐なる故衆人の出水に堪ずして久義
戦て衆人を退く伊能を集んと謀る謀る久豊公
に告る　公因て衆人と悪む故に是を詳に十忠欺て

久豊と報て又安藤九と報さんと伊能信濃守大に怒る
安藤九を捕て因縁を深川新網と称する大将（居久之男）山口勝
り相知る久糟屋安藤を教ふの親戚く共に伊能家　憂とせざる程蜂と
駆く伊能に到り十忠四郎義孫私に久豊公命
ず忠臣為せんと知て帰り市来佐度守
家親（安藤九の親戚）是とやうさに安藤九と市来に行ふ於是伊
能を捨て市来に寄る　豊久公勝久に在て曰く告てやうさ
勝久を告て曰く吾肥後守の親
接んとせるにやんんぞ渡辺朝に通じ父君に悪し

遂に佐邦に走て害を避る久豊肥前国に走る（侍従山田孫次郎）
（是後て走る義教を詐に也）十郎既に志を得て伊作に至らんとす
久豊云ふ彼為人貪り是を殺し財を奪ひ人倫を
背き十悪大に怨怖し伊作と云く知行人に離れ本末
端を匿す居に於て久豊乙伊作を安堵に
定る如き伊作張盛を以て代く伊作と号す
（安堵先猶市来に在り）

二十年癸卯

此時関東大半治て（侍従薩州の職未勝紀八郎等堂の末後鎌倉殿氏降り三家祥等院を文降て六巻三氏帰誠して来る）

河を攻（黎明と云）久豊乙吉利某（伊集院新久と云）を以て田園中の平なる賀久に
伊集院頻久を陥るに用くなり兵に遂く偽り使潜んと
畏り吾ちく新久女有りて豪せ共長く相親しく遂考
の憂なかりき此是を講き吉利即新久に告く新久
大に歓び女を新久（後三男を生む出れり有久と称し大隅氏の祖）に是石谷及び河色を賜
如新久甚き神大の代を元復し大隅守源久と名乗伊集
院を譲り色に河色に移り薙髪して乃宗と称す（此時道宗法名）
明神と河色に
是り今猶在り

二十一年甲辰

文禄元年（応永十九年）久豊公伊東大和守祐安と日州に戰て利
なく地を失ひ和睦を結ひんことを請事
無幸なりといへとも因幡に出て果さすして大軍を二隊に
別て沖津より軍す（傳云依久勢者る親久平田左馬頭重宗伊東祐安大手を攻る手勢を牧鹿屋和田高木道より）之渡直
音の軍先登す続て北田城を攻ひとて柚木治部左衛門
（伊東祐安海江田本城と云）峠の二城を攻る故
敵威伊東安藝守にて海江田を守る久豊公
沖津より船を指戸崎に向て海を廻て海江田
の峠城を攻んとす城兵に奇して進て伊東
軍と戰

海江田を攻むつい七浦と船を一日に打出の海岸を廻て宇振山
に登り（傳云久豊公十二月末に西の中田）進て海江田を囲む（正月中旬）宇佐伊東安藝
守飫肥城を渡るに因て落とそふ久豊公強かて時の
伊東祐安首井清武の二子を以軍と率て法花川を
下りに進と雖も久豊公伯父伊藤祐親久と共に鹿屋某と謀て城
攻めの自川を渡て沖津川（傳云北田能知久安鹿屋某と謀て田敵二千人に為て川を渡り挑戰
を必せり城中又法花寺の戰公尾を以て戰出て命と戰川と
もに出て敵を撃ん沖津に戰を尾を以て敵を撃ん）
渡て戰挑む伊藤祐親久奇して敵を退く久豊公城中を
力攻と落とて出面に是を沖津に安藝守と戰て加於敗る

遂ニ 久豊公城に入給と雖ども 義久公と代々家
居し 伊集院を領し給ふ 是川東川小潭鹿児島 公に屬し
侍云 和田高木佛と神ひ田野と称ス 薩摩氏軍と並ひ紫と川路に築て守り 太閤
秀吉公西征の時 島津氏降り 薩州の国押伏見使立て 世く縣城主守り縣令八政て定
云 天正辛巳 秀吉征西の時 太閤既除せ給ふ 来て和睦に臣たり 時に豊後国大守 大友氏 備と老し
て 和と絶く 久豊公是と海に 於是伊集院安海江田城る
来り 義久公に渡し 久豊公六庫四方に存り 和と絶して 国を是より日州乃
九州也に 久豊公京師に 船 足利義持公に渡らんとし
病を叫して果ス
二十二年乙巳

正月 二十一日 久豊公薨ス 享年四拾一歳 天寿寺と謚ス
侍云 公の葬る地と詳にせず 或云谷山の田中林なり
治津家と号ス 是則 公と葬る地也 故に 詳にせず

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan